

# 1

## 地域の良さを探す手法 —「地元学」の紹介— 「ないものねだり」はやめて、「あるもの探し」をしよう！

### 1 「地元学」とは

#### ■「地元を学ぶ」のではなく「地元を学ぼう」！

「地元学」は、自分たちが住む地域を足元から見つめ直して、地域おこしにつなげる取り組みです。これは熊本県水俣市の吉本哲郎氏が提唱し、現在は地元学ネットワークを立ち上げ、国内はもとより海外でも実践されています。「地域のことをみんなで知れば、新しい何かが見つかる」という意味合いのまちづくりの実践的手法です。吉本先生からご指導頂いた島根県浜田市弥栄町での地元学を振り返り、記録としてここに残したいと思います。

#### ■「風の人」が「土の人」を生き活きさせる

地元学では、在住者が「土の人」、外部の者が「風の人」となり、「風の人」が「土の人」に暮らし・想い・生きてきた歴史など、あらゆる事柄を尋ね、それをまとめて在住者に対して報告会を実施し、そこにあるものの共有を図ります。

「風の人」は「土の人」が普段何気なく生活している様子を取材することで、外からの視点でその価値を見つけ、在住者に気づきを与え、それを活かすきっかけを作っていきます。「地元にあるものを探し、それを組み合わせ、新しいものを作る。そんな取り組みが村を元気にする」と吉本氏は話します。

### 2 地元が元気になる「地元学」

#### ■「人が元気になる」「自然が元気になる」「経済が元気になる」

吉本氏は地元学は人、自然、経済の3つを元気にする可能性があると話します。そしてこれらを次のように解説しました。

地域の色々なことを調べることによって、それをきっかけに人との接点が生まれてきます。農村は、ここで暮らすために様々な知恵と技を必然的に持っていますが、日常のことであるためそれに気付かないでいます。それを、気付いてもらうための作業を行うことによって、持っているもの（自分の技）が注目されるきっかけになるのです。

注目されれば、人に見られているという意識が生まれます。家の周りを気にかけるようになると、きれいにしようという動きが出てきたり、周囲に気を配る変化が生まれてきます。例えば、家の裏山を調べてお金になる素材があったら、それを集めて販売しようという動きが生まれます。そして、その素材を持続的に採種するために、山を管理する行動に繋がってくるはずで、気付くことによって身の回りの自然が注目されることになるのです。

そして収益活動が生まれると、次は雇用を生む考え方もできてきます。地域の人々が集まり、商品づくりに励むようになり、売れる商品にするための工夫をみんなで知恵を出し合うようになります。モノが売れる喜びを共有することで、持続的な活動も期待できるようになります。

# 2

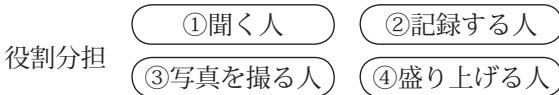
## 地元学を実践する

あるもの探しを切り口に、それを使う「人々」の気持ちに迫ろう！

### ■「地元学」を行う5つのステップ

「地元学」を実際に進めるには以下の5つのステップをふみます。①取材するチームをつくる、②あらかじめ取材するテーマを決める、③テーマに沿って、作り方、使う道具、全てを聞き取る、④聞き取った内容と画像を使って絵地図にまとめる、⑤絵地図にまとめたらずに報告会をする、の5ステップです。

### STEP1 取材するチームをつくる



地元学の実践においてチームを作る理由は、聞き取る対象者のありのままを記録することが最も重要なことだからです。対象者が発する一言一言を記録すると、その発言の中に、その人の深層にある、地域で歩んできた中で育まれた人生観や誇りの部分が表面化します。その部分を聞き漏らさず、見つけることが地元学において大切なことのひとつです。また④盛り上げる人は、初対面で話しにくい対象者を和ませるため、これもまた大切な役割と言えます。

### STEP2 あらかじめ取材するテーマを決める



テーマを一人一つずつぐらい持ってでかけます。集落の特徴や季節によって工夫しましょう。

テーマ例：

- ・森の使い方  
(どういうふうに今、または今まで山とつきあってましたか)
- ・おやつ、昔食べていたもの
- ・畑で何をつくっているか
- ・道具、人生など……

### STEP3 テーマに沿って、作り方、使う道具、全てを聞き取る

世帯数が少ない集落では全戸を訪問しますが、多い集落では数戸を選ぶこともあります。

#### ■ 聞き取りの方法

##### ①笑顔になったものを掘り下げると、いろいろ見えてくる

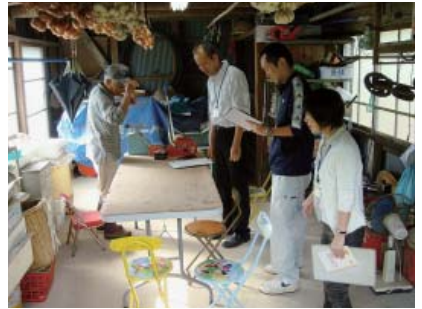
地域の人たちに対して、「ここに何かありますか」と漠然とした質問をすれば、「何もない」と答えるでしょう。しかし丁寧に会話を重ねると、次第に打ち解けて笑顔になってくるポイントが必ずあります。世間話を切り口にするなど時間をかけることも、その人の気持ちを引き出すには大切なことです。

笑顔になってくれた話を掘り下げていくと、その人の背景にある人生観や思い出が次第に見えてきます。



##### ②私情を入れずに聞いたことをそのまま記録する

聞いたことをそのまま、できれば方言まじりの口調で記録しましょう。「この人はこうだった、だけどころ思う」といったような私情は入れないこと。その人のありのままを残していくことが大事です。



##### ③納屋や畑は生きてきた証拠が詰まっている

納屋には様々な道具が保管されています。一つひとつに役割があり、丁寧に用途をまとめていくと、この土地で自然を上手に使った暮らしが見えてきます。

### STEP4 聞き取った内容と画像を使って絵地図にまとめる

聞き取った内容は時間を置かず模造紙にまとめます。多色のペンや撮影した写真を使って華やかに描きましょう。絵地図には、タイトル、作成日、作成者を記入しましょう。



絵地図作成に使う道具



作成の様子

## STEP5 絵地図にまとめたらずぐに報告会

まとめたらずぐに報告会を実施します。地元学のプログラムを構成する際には、報告会になるべく大勢の人の参加を呼びかけることが大切です。



### \* 絵地図の例



島根県浜田市弥栄町・下田野原集落にお住まいの梅津さんの暮らしについて調べた絵地図です。

梅津重見さん、ヤヨヒさんは、お二人とも田野原で生まれました。結婚後、いまの家ですぐと暮らしてこられました。山水をパイプで引き水を確保している様子や菜園でたくさんの種類の野菜を育てているほか、若い頃に魚、獣、鳥を取って食べた思い出などを書き記しました。また夫婦仲良く二人で自給的な生活を送っておられました。

そんな梅津さんご夫婦は都市部の偏った生活様式を危惧しておられ、そこで仰った言葉は「今度は私たちがゆたかになる番」でした。その一言を絵地図のタイトルにしました。

## 地元学が起点となった取り組み

### ■ きれいになった淵 秋祭りも

弥栄では地元学を実践したことによって、人々がつながり様々な取り組みが始まりました。小角集落での地元学は、弥栄の小学生が川遊びをする「どうどう淵」について調べ、集落の人々に発表しました。その後、集落では子どもたちが安全に遊べるように、地元住民が集まって淵の周りに繁っていたヨシやカヤを刈り、滑りやすかった川に降りる場所に階段を付けました。高齢者の多い小角集落にとって、子どもの歓声はとてうれしく、それがいつまでも続くようにとの願いがこもった取り組みでした。そして、地元学は在住者の結束が強まり、他出している小角出身者を招いての秋祭りが行われました。しばらくの間途絶えていた神楽が舞われ、在住者と他出者が久々に出会い、昔話に花を咲かせ、「ワシらはいまもここでがんばるとるよー」という、メッセージが伝わってきました。



### ■ おいしさ沢山 軽トラ市

また、地元学では家庭にある菜園をいくつも調べました。多様な品種の野菜がたくさんあることが分かり、そしてそれを加工したおいしい食べ物がたくさんあることが分かりました。収穫した野菜の用途を聞くと、自家消費とお裾分けする方がほとんどで、出荷し換金している人はほとんどいませんでした。そこで、浜田市街地で弥栄市を開くことにしました。たくさんの野菜や加工品からしいたけの原木まで弥栄のあらゆるものを販売し、大変好評頂きました。しかし、こうした規模の大きな出店は労力がかかり、持続的には課題が残りました。そして、弥栄の若手農家が集まり、続けられる販売方法を自ら検討し、収穫した野菜を定期的に販売する少量多品目多頻度で行う「軽トラ市」に手法を変えて、販売する取り組みが始まりました。浜田市街にある、緑ヶ丘団地は高齢者が多く、新鮮な野菜がすぐそばまで売りに来てくれる「軽トラ市」は住民にとっても喜ばれ、1回あたり平均 30,000 円の売上げを確保しながら今ではすっかり定着した取り組みになりました。



### ■ 始まった「ええとこ歩き」

さらに、弥栄の良さを外部の人々に紹介する観光プログラム、「みんなでつろうてえとこ歩き」が始まりました。参加費をひとり 3,000 円に設定し、弥栄の普段の暮らしを住んでいる人が案内しながら集落を巡ったり、季節の食材を使った料理体験などが「いつ来ても弥栄の良さを体感できる」プログラムです。毎月 1 回の実施を目標にこれまで 6 集落で行われ、毎回 5 ～ 10 名の参加者で賑わっています。

弥栄の人々が身につけている自然を上手に活用する暮らしの知恵と技は、これまで当たり前のことだと思い込んでいました。地元学は「実はすごいこと」を表現する最適な手法だったと言えます。このような方が、ガイドする弥栄はリアリティに溢れ、農村独特の人情に触れることがで

きます。もちろん、弥栄に住んでいる人が、「弥栄が  
いいところ」と感じていなければ、来訪者が楽しめる  
はずはありません。地元学でみんなで調べて共有する  
ことで、一つひとつ、その良さに気付いていったので  
す。

みんなでつろうてえとこ歩きの到達点は、弥栄を  
知ってもらい、弥栄のファンになってもらうことです。  
その中から一人でも多くの定住希望者が見つかること  
を、関係者は期待しています。



## ■ 人も自然も経済も元気になる地元学

この他にも、山を弥栄の住民や市街地の人々が一緒になって、管理する動きが芽生えたり、加工品づくりに積極的に取り組むグループが結成されるなど、弥栄に小さなうねりが起こり始めています。

知ること、そしてそれを共有する地元学を経て、仲間ができ、足下の自然に目を向けるようになり、少しでも稼いでみようという意識が生まれました。地元学を提唱した吉本哲郎氏が言う、「人が元気になる、自然が元気になる、経済が元気になる地元学」がまさに弥栄でも起こっているのです。

## 地域を知るのに役立つ便利帳①

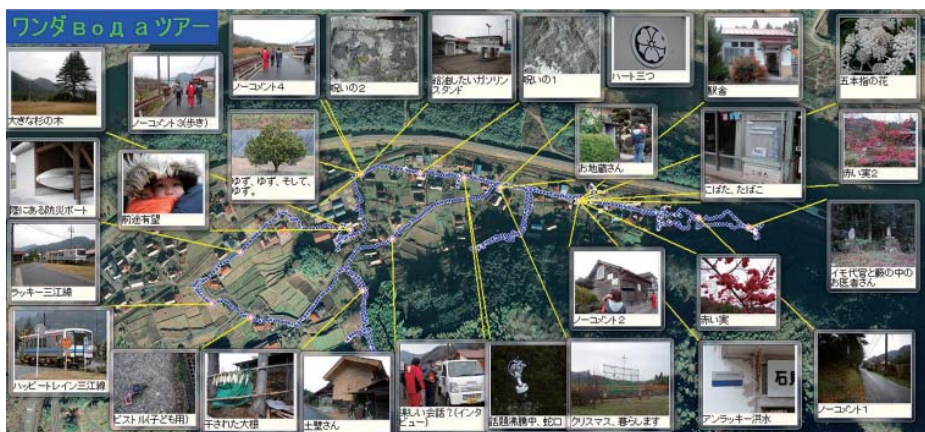
# GISの活用

地元学では、聞き取った内容を絵地図にまとめましたが、ここでは、様々なデータをパソコンで管理し「情報の重ね合わせ」を行う、GISの手法をご紹介します。

### ■ GIS という道具を使う

GIS(Geographic information System：地理情報システム)は、地図上に書かれた情報や位置に関する様々なデータをパソコンで管理し活用することができる道具です。

地元学では、聞き取った内容と画像を絵地図としてまとめますが、絵地図には聞き取った内容や写真の一部しか表すことができません。GISを使ってパソコンに集めた情報をすべて保存すれば、絵地図に表せない情報も残しておくことができ、後から様々な活用することができます。

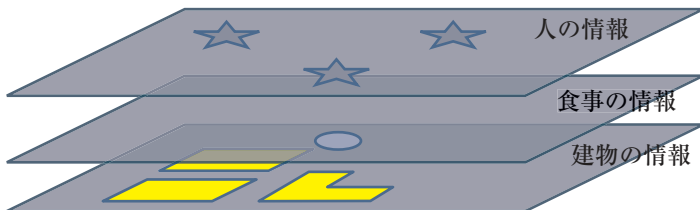


簡易 GIS ソフト「地図太郎」を使用して作成した地域の情報（簡易 GIS ソフト「地図太郎」東京カートグラフィック株式会社）

GISを使った情報の活用方法として、最もよく使われるのが「情報の重ね合わせ」です。

上の図を例にすると、たくさんの写真を食事撮影したもの、建物を撮影したもの、風景を撮影したもの、といったように撮影した写真の情報に「食事、建物、風景、人……」といったキーワードをつけることができます。

GISで、キーワードごとに別々の情報として整理しなおすことができ、人と食事、建物、風景などとの関係を重ね合わせて地図上に表現することができます。



## 情報の重ね合わせ

作成 今井修（島根県中山間地域研究センター 客員研究員）

## ■ GIS の活用例

### グリーン・ツーリズムに活用

美しい景色、美味しい食べ物、楽しい体験を紹介する方法に、グリーン・ツーリズムがあります。GISを使いながら、美しい景色の場所、美味しい食べ物の場所、楽しい体験の場所を重ね合わせ、いくつかのコースを設定します。途中を案内する人の特性に合わせて、コースを絞り込みます。

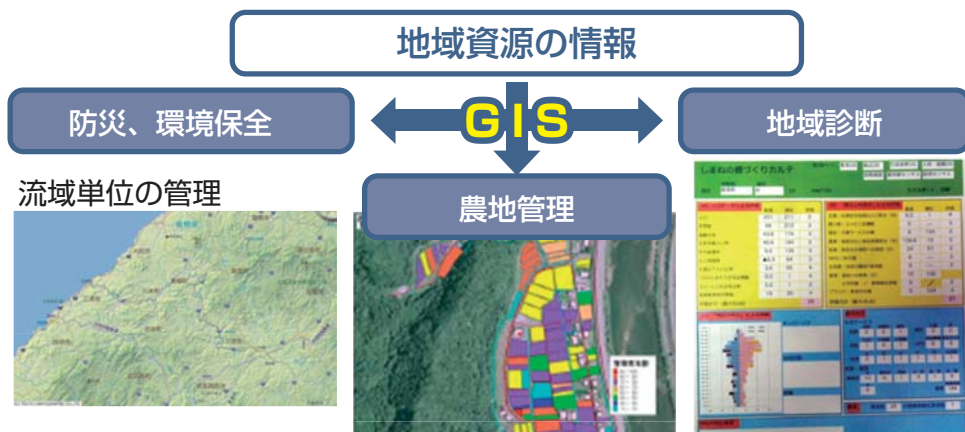
コースができれば、案内図を作成することや、コースを歩いた記録をGISで作成します。



コースを歩いた記録

## ■ これからの可能性

地元学で収集した地域資源の情報は、他の情報と結びつけ、いろいろな活用法があります。流域単位に情報を整理し、風水害の防災活動に活かしたり、環境保全活動に活かすことができます。また地域課題の把握、農地管理の活用の検討に活かすことができます。



GISは、地域コミュニティ活性化ツールとして活用できます



## 他人事では何も始まらない

地元学を実施した集落では、全てではありませんがそれをきっかけに動きが出始めました。子どもが遊ぶ川を整備したり、出身者を迎える祭りを企画したり、田舎ツーリズムの受入を始めたりと、地元学をきっかけに集落で「今後何をしたらよいか」を話し合うようになりました。

その時、有効になったのは絵地図です。外からの目線で調べた内容は、大切(貴重)だと思っていたなかったモノゴトを大切(貴重)と感じるようになりました。

しかし、全ての集落が地元学を契機に動き出したわけではありません。そこには「一肌脱ぐ」人がいなければ始まりません。動きが見られるようになった集落に共通することは「担う人がいる」ほかありません。

地域づくりはいつも人手不足が課題に挙げられますが、中心になる人とそれをもり立てる仲間づくりを地域のみんなが一緒に考える行動がまずは不可欠なのです。

## 用語解説・参考文献